

それでは、本日より**創世記**の学びに移って行きたいと思います。今日は**創世記**の序論に留まっていくと思いますし、また今日だけでは序論のすべてを終えることはないと思いますので、おそらく何回か序論をやるかと思います。最低でも今日と、そして次回、2回はやると思うのですけれども、第一回目の**創世記**の学びは2005年5月29日の日曜日から始めたと思います。そして今は2015年ですので10年ぐらい前の話です。5月29日の日曜日に開始して、それが**創世記 1章 1節**の連続講解説教の始まりだったわけです。終わったのはいつかと言いますと2007年7月15日と記憶しております。およそ2年と半月ぐらいの期間をかけて108回、1週間に1回日曜日に**創世記**を学んでいましたが、108回、だいたい2年ぐらいということなので、またこの学びがどれほど長くなるのかはちょっと計画していないので分かりませんが、前回よりはかなり掘り下げてスローペースで進めて行きたいと思いますが、前回の10年前は最初の頃は30分とか45分ぐらいの学びだったと思いますので、今はもう2時間超というのはザラにありますので、そういったことから言いますと、もしかしたら回数は減っても時間的にはそんなに変わらなくなるかもしれないし、その辺はちょっと想像がつかないんですけども、また楽しみにして頂いて、前回の学びも踏まえながら、また新たな気持ちで進めて行きたいと思います。序論なので、**創世記**という書物はどんな書物なのかということからまず皆さんと共に分かち合って行きたいと思います。

ヘンリー・モーリスという人の言葉をまず初めに紹介させて頂きたいと思います。このヘンリー・モーリスという方は、創造論ミニストリーの草分け的存在です。もう天に召された方ですけれども、アメリカにある Institute for Creation Research、(ICR というふうに略称で言います。)の創設者の方であります。私もアメリカで学んでいる時には、このICRのミニストリーを通して創造論の学びを初めて本格的に行いました。当時はそのICRのメンバーで、教授で世界的にも著名な方が、デュウェイン・ギッシュという方がいらっちゃって、その方が直接カルバリーチャペルのバイブルカレッジに来て下さって、創造論の講義をして下さいました。ですから私たちも幸いそのミニストリーがカルバリーチャペルととても親しい関係にありましたので、バイブルカレッジでは創造論という1つの枠がありまして、それを専門的に学ぶことが出来ました。これは弁証学、あるいは弁証論の一部なんですけれども、世の中には創造論と進化論というものがあります。そういう呼び方をしていないまでも、すべてのものは創造主である神によって造られたという、その理解のもとに世界観を持つというその考え方と、もう一つは創造主なる神など居ないんだと、そういう神を否定して神抜きの世界観を持つという、その2つの考え方、2つの世界観。それはすべての価値観に通ずるものであります。倫理観もそうですし、人間観もそうです。そのような2つの考え方によって人は大きく分けられます。

今私たちが**創世記**を通して学ぼうとしているのは、創造論の立場です。創造主が存在される。すべてのものは創造主によって造られたので、すべてのものには創造者の意図が含まれているわけです。つまりすべてのものには創造主の目的とか計画があって存在している。その一方で創造主の存在を否定するという考え方、それは進化論が典型的であります。すべてのものは偶然に発生したんだと。偶然ですからすべてのものには意味がないわけです。目的もないわけです。価値もありません。人間には尊厳などないわけです。元々はアメーバのようなものから、下等生物から段々進化していったって高等生物になって猿から人間になりましたというのが進化論の考え方ですから、偶然に生じただけで、偶然に生き残って、自然淘汰の中で今の姿になっただけであって、その人は居ても居なくてもどちらでもいい存在です。元々偶然に生まれただけですから、別に死んでも生きていてもどちらでもいいわけです。そういう考えの下には、命の尊厳なんていうものはないわけです。人を殺したって構わないわけです。赤ちゃんをお母さんのお腹の中で生きたまま切り刻んで、ゴミとして処理したって全然心も痛まないわけです。なぜならば進化論によれば、すべてのものは勝手に生じたからです。そんなものには何の意味も価値もないので、殺したっていい、捨てたって構わない。それが神抜きの世界観、それが進化論をもとにした考え方です。そして、そういったものから

いろいろなシステムというものが生まれたわけです。例えば共産主義なんかはその典型です。神など居ない。創造主など居ない。進化論をベースにしているわけです。ナチスドイツもかつてヒトラーが進化論をベースに自分の思想を構築して、そしてナチズムというものを持って自分の世界を作ろうとしたわけです。ユダヤ人を虐殺することには何の良心の咎めもなかったわけです。自然淘汰されていくだけのことだと。そういったいろんなところにこの創造論と進化論の考え方というのが浸透していますので、私たちはこの**創世記**から創造論についてもしっかりと学びながらも、神のない世界もこの中に描かれています。それがどんな混沌とした世界なのか、混乱した世界なのか。そこには無秩序、崩壊、破滅しかない世界。それが罪の世界だということです。“罪”というのは「**的外れ**」という意味です。本来神という方が**的**であって、私たちは創造されたものとして創造主に向けて造られたわけです。その**的**を完全に外すとどうなっていくのか。崩壊していくんだということがこの書物の中に書かれています。

ちょっと話が飛びましたけれども、そのヘンリー・モーリスという方が創造論ミニストリーの草分け的な存在なんです。彼がこういう言葉を言っています。「**創世記は今まで書かれた書物の中で最も大切な書物です。**」これは驚くべき言明です。「創世記は今まで書かれた書物の中で最も大切な書物です。」それは決して言い過ぎではないということも今覚えて頂きたいと思えます。その根拠を今からお話して行きますので、まずは**創世記**という書名から見て行きたいと思えます。この書名というものは本来ヘブル語で書かれていた聖書ですから、その書名にはヘブル語の書名がついているわけです。“ベレシース”と言います。この“ベレシース”という言葉は、**創世記 1 章 1 節**の冒頭の言葉から由来しています。『**初めに、神が天と地を創造した。**』の「初め」という言葉はヘブル語で『**ベレシート**』と言います。その“ベレシート”に由来する書名が“ベレシース”で、**創世記**と日本語で訳されます。ギリシャ語では『**ゲネシス**』と訳されて、これは英語の“**Genesis**”の語源となっています。『**ベレシート**』にしても『**ゲネシス**』にしても意味はほとんど変わりません。“起源”とか“原初”、“**origin**”ということです。ギリシャ語の『**ゲネシス**』もヘブル語の『**ベレシート**』もそれほど意味は変わりません。“誕生”とか、“発生”、“創始”、そういった言葉が訳語としてあります。すべての起源、根元、ルーツは**創世記**に見出すことが出来る。それがゆえに**創世記**は今まで書かれた書物の中で最も大切な書物と言えるわけです。聖書の主要教理は、ドクトリンのルーツはすべて**創世記**に見出されます。**創世記**はキリスト教信仰の土台と言っても良いぐらいです。神の主権的な選び。神の救いということです。あるいは信仰義認というもの。それは元々救いの必要性があったからです。人は罪を犯して墮落したわけです。その結果、神と断絶を余儀なくされて、そのために人は救いを必要とするようになったわけですが、そういった救いの元始、それは原罪というものであります。原罪、**original sin** と英語で言います。アダムとエバの罪がもたらした根源的な罪、および生来の墮落した状態のことを言います。人は生まれながらに罪人である。罪を犯したから罪人になるのではなくて、罪人だから罪を犯すのだというもの。それが原罪というものです。小さな子に嘘をつくことを教えなくても、いつの間にかあなたの可愛い子は嘘をつくようになります。勝手に人の物を取ってきては自分の物だと言い張ります。そして平気で自分の思い通りにならなければ他人に危害を加えようとします。殴ったり、齧^{かじ}ったり、暴言を吐いたり、そういったことは誰も教えてないわけです。でも元々そういう罪の性質が人間には埋め込まれているわけです。それが**原罪**と呼ばれるものです。

そして、その原罪に対して“**原義**”という言葉があります。これも元々神は私たちが罪のない者として造ったわけです。墮落する前、創造当初はすべてのものは非常に良かったと、神がそうおっしゃっています。そして人間も神のかたちに造られたと、そのように**創世記**に書いてあります。その状態のことを“**原義**”と言うわけです。その原義というものが原罪によって破壊されたわけです。それを失ってしまったと言ってもいいと思えます。

そして、その状態を救うべく神は驚くべき壮大な救いのご計画を立てたのであります。それが“**原福音**”と呼ばれるものです。その“**原福音**”は具体的には、神の御子が人の姿をとってこの世に生まれ、そして全人類の罪を代わりに負って身代わりに死なれる。代償死とかたちで贖う。それが“**原福音**”というものです。この原福音については**創世記 3:15**に書かれているものなので、その時には詳しく見たいと思えます。“原”というのは **original** という意味です。ですから原罪、原義、原福音、これはすべて起源の書である**創世記**に見ることが出来ます。

そしてもうひとつ聖書の解釈をする上で重要なルールがあります。法則と言って良いと思います。それは“**初記の法則**”と呼ばれるものです。最初に出てきた言葉、それが初記、初めに記されているということです。その“**初記の法則**”というのは、ある言葉の意味とか概念を知りたいければその言葉が最初に記述されている聖書の箇所、そこを見れば理解出来るというものです。例えば愛について知りたい。では愛という言葉が最初に使われている箇所はどこか。当然それは**創世記**にたどり着くことが出来るわけです。その**創世記**の中で最初に愛が使われているところを見ると、愛というものがどういうものか、本来どのような意味なのか、概念なのかということが一目瞭然に分かるというもの。それが“**初記の法則**”というものです。ですから聖書理解にはこの**創世記**は欠かすことの出来ないものだということはお分かりだと思います。それが故に**創世記**は今まで書かれた書物の中で最も大切なものだと言えるわけです。

他にもありとあらゆる森羅万象のルーツ・起源というものがこの**創世記**の中に見出せます。宇宙の起源、秩序の起源、太陽系・大気圏・水圏の起源、生命の起源、人間の起源、結婚の起源、罪惡の起源、言語の起源、政治の起源、文化の起源、民族の起源、宗教の起源。そして神の民、選ばれた民、イスラエルの起源。そうしたことが全て**創世記**の中に見出せます。**創世記**は真の科学、真の哲学、真の歴史の土台と呼ばれております。この土台の上に建物が建て上げられていくわけです。その建物が私たちの人生となります。

この**創世記**は勿論聖書 66 巻の最初の書物なので、神の啓示の土台でもあります。聖書 66 巻はこの**創世記**に^よ因っているということです。この**創世記**抜きには聖書は理解出来ないというものです。とりわけ**創世記**の中の前半の **1**～**11** 章の内容、そこにはほとんどの森羅万象の起源が記されております。この最初の **11** 章だけが、これが聖書全部 66 巻は 1,189 章ありますから、その土台となっているということをこれからの学びにおいて皆さんは確信出来ると思います。その辺はじっくり見て行きますので、どれほどそれが私たちの全ての基盤となっているのか理解出来るようになりますと思います。

そして先程紹介したヘンリー・モーリスという方の言葉をまた紹介させて頂きたいと思います。「このように**創世記**は実際に全ての真の科学、真の哲学の土台であるばかりでなく、真の歴史の土台です。そして何よりも聖書に書かれている神の啓示の土台です。**創世記**ほどしばしば、しかも聖書の他の多くの書に引用されている書はありません。」66 巻の土台だというその^{ゆえん}所以ですが、例えば旧約聖書では、アダムの名は**申命記**、**ヨブ記**、**歴代誌第一**に。ノアの名は**歴代誌第一**、**イザヤ書**、**エゼキエル書**に出てきます。アブラハムの名は旧約聖書 39 巻のうち 15 の書に。新約聖書 27 巻のうち 11 の書に出てきます。ヤコブの名は旧約聖書の**創世記**を除くと旧約聖書の 20 の書と新約聖書では少なくとも 17 の書に出てきます。特別な意味でイスラエル人やイスラエル民族に言及しているところではそれぞれ**創世記**の基本的な権威をハッキリ認めています。なぜならイスラエルはヤコブに与えられた新しい名で、彼の息子たちがイスラエルの 12 部族になったからです。**創世記**を離れてはイスラエルの存在も旧約聖書の残りのすべての書の存在も説明できなくなってしまう。実際に**創世記**の前半は **1**～**11** 章と言いましたけれども、後半は **12**～**50** 章まで。前半よりも後半の方が長いわけですが、その **12**～**50** 章まではまさにイスラエルの起源です。アブラハムから始まってヨセフまでの族長たち、アブラハムの息子のイサク、そして孫のヤコブ、そしてヤコブの 12 人の子どもたち。彼らがそれぞれイスラエルの 12 部族を形成していくわけですが、その歴史が**創世記**の後半に記されています。そして、その歴史の方が書面を長く割いているわけですが、天地創造というのは大変エキサイティングな内容であります。でも、せいぜい **1**～**2** 章ぐらいにしか天地創造については触れられておりません。**創世記**以外であれば、**ヨブ記**、**詩編**、**イザヤ書**にも少しは書いてあります。そのぐらいであります。

その一方で**創世記**の後半の **12**～**50** 章までのイスラエルの起源についてですが、それは別の言い方をしますと神の贖いの歴史と言っても良いと思います。天地創造ばかりが目立ってしまって、創造論というミニストリーにおいても特に進化論との対決があったりして、創造主である神を否定する人たちに対して如何に弁証していくか。そのためには科学的なアプローチをもって「進化論には何の論証もない、証拠もないんだ。」ということ論破したりすることがどうしても出てくるんですけれども、でも本来創造論というのは、天地創造にハイライトが当てられているというよりも、むしろ創造主のその贖いのわざにハイライトが当てられています。たった 6 日間で天地は造られました。6 日間しか

要さなかったんです。神が使ったのは 144 時間だけと言って良いと思います。その一方で贖いについてはどれぐらい神は犠牲を使ったかと言いますと、それは御子イエス・キリストという犠牲を用いて贖いのわざを成し遂げられたのであります。そして、その御子イエス・キリストこそが、その贖い主こそが**創世記**のテーマでもあり、聖書 66 巻の主要テーマであるということです。そのことも皆さんには最初に踏まえておいて頂きたいと思います。

もう一度ヘンリー・モーリスの引用に戻りたいと思うのですが「**どちらかと言えば新約聖書の方が旧約聖書よりも創世記に依存しているようです。**」これは見落としがちなポイントです。旧約聖書よりも新約聖書の方が創世記に依存している。何故かという点と少なくとも**創世記**の 165 箇所が新約聖書に直接引用されている。そのうち多くは 2 回以上引用されていますので、**創世記**から新約聖書への引用や言及というのは少なくとも 200 箇所以上あるということです。例で言いますと、**創世記**が新約聖書に直接言及されている例ですが、世界の創造について**創世記 1 章**に記されています。それは**ヨハネの福音書 1:3**、**コロサイ 1:16**に言及されています。またアダムとエバの創造については、これも**創世記**の**1~2 章**にかけて言及されていますが、新約聖書では**第一テモテ 2:13~14**に言及されています。それに合わせてアダムとエバの結婚についてもやはり**創世記 2 章**に記されていますが、**第一テモテ 2:13**これは重複していますが、しっかり新約聖書にも記されています。そして、エバの誘惑については**創世記 3 章**に記録されていますが、これは**第一テモテ 2:14**に記録されています。アダムの罪についてはやはり**創世記 3 章**にあります。それは新約聖書では**ローマ 5:12**、**第一コリント 15:22**にあります。アベルとカインの捧げ物については**創世記 4 章**に記録されていますが、これは**ヘブル 11:4**に記録されています。そしてカインによるアベルの殺害、これも**創世記 4 章**にあります。第一**ヨハネ 3:12**に言及されています。カインが殺された後、アダムとエバの間にセツが生まれます。セツの誕生は**創世記 4 章**に記されています。それは**ルカ 3:38**にも言及されています。そしてエノクという人が生きてままた神のもとに引き上げられていく、これは携挙と言って良いと思います。エノクの携挙については**創世記 5 章**に記されています。これも新約聖書では**ヘブル 11:5**に言及されています。そしてノアのあの洪水の前の乱れた結婚について、墮落した結婚について、その辺は**創世記 6 章**に詳しく記されていますが、**ルカ 17:27**にも言及されています。世の終りはまさにそのノアの洪水前の状態と同じだということが預言されています。そしてノアの洪水については**創世記 7 章**、これは**マタイ 24:39**にも言及されています。そしてノアとその家族が全部で 8 人救われたという内容は**創世記 8~9 章**に記録されていますが、**第二ペテロ 2:5**には、新約聖書の中で言及されています。そしてセムの系図、これがアブラハムに繋がっていくんですが、**創世記 10 章**の系図が**ルカ 3:35~36**に言及されています。そして、アブラハムの誕生は**創世記 12~13 章**であります。これも**ルカ 3:34**。アブラハムが召されていく、アブラハムの召命についてはやはり**創世記 12~13 章**に、それは**ヘブル 11:8**にあります。75 歳でアブラハムは召されて行きます。天に召されるのではなくて、約束の地へと導かれて行きます。そして、メルキゼデクというサレムの王であって、いと高き方の大祭司と呼ばれるメルキゼデクが登場して、そのメルキゼデクにアブラハムが十分の一を捧げたりするのですが**創世記 14 章**にそのことが書いてあります。このメルキゼデクこそ受肉前のキリストであります。彼については**ヘブル 7:1~3**に言及されています。そしてアブラハムのその信仰が義と認められたというその信仰義認については**創世記 15 章**に記録されていますが、これは**ローマ 4:3**に再言及されています。そして、アブラハムの最初の子どもはイシュマエルと言いました。本来これは約束の子ではなくて、約束の子を待たずにアブラハムとサラとの間で神の約束を自己実現しようとしたわけです。サラの女奴隷ハガルを使って代理母の役割を果たしてアブラハムの子孫を残そうとしたんですが、その結果生まれたのがイシュマエル。**創世記 16 章**に書いてあります。このイシュマエルについては**ガラテヤ 4:21~24**に言及されています。そして、約束の子イサクの誕生については**創世記 17 章**に記録されていて、これは**ヘブル 11:18**に言及されています。そして、アブラハムの甥ロトと、そしてソドムについて、ソドムの滅亡については**創世記 18~19 章**に書かれていますが、これは**ルカ 17:29**に言及されています。世の終りはロトの日のようだとされています。ロトの時代のごとく。まさにそれは今のことを言っています。そして、イサクの誕生については**創世記 21 章**、**使徒の働き 7:9~10**に言及されています。誕生の約束が**17 章**でしたが、誕生については**創世記 21 章**です。そして、イサクを全焼のいけにえとして神に捧げるというアブラハムにとっての人生最

後にして最大の試練は**創世記 22 章**に記録されていますが、これが**ヘブル 11:17**に言及されています。全部ではないですけども大体天地創造のところからアブラハムの人生の最後の部分まで、それだけとっても新約聖書の中にすべて言及されているということを今皆さんに確認して頂きました。

再びヘンリー・モーリスの引用に戻りたいと思いますけれども、初めの**創世記 1～11 章**までがすべての聖書の残りの部分の土台となっているということを言いましたけれども、そこが実は最も攻撃されているんだという実態、現実というものを覚えて頂きたいと思います。「聖書はすべて神の靈感によって書かれていない。これはただの創作である。もうそんな天地創造なんていうものは神話に過ぎない。ましてや 6 日間ですべてのものが出来上がってしまうなんて、そんなことはありえない。この科学の時代にあってそんなおとぎ話を信じろという方が無理だ。」と言って、この**創世記**の特に**1～11 章**の内容、すべてのルーツ・起源の部分というのが、懐疑主義者と呼ばれる人たちから攻撃されたり、勿論進化論者もそうですし、そしてクリスチャンと呼ばれる人たちの中にも自由主義の神学を持っている人たち、自由主義神学者の人たちです。彼らは聖書をすべて神の靈感によるものと信じていません。部分的には神の靈感だと認めたとしても、特に**創世記の 1～11 章**は、これは創作だと彼らは考えます。後代の人たちが後になって書いたもので、従来伝統的にはこれはモーセという人が編纂したというものですが、モーセの時代にそんなことは書けるはずがないと。それから数千年経ってから後代の人書いたものだ。ですからこれは文字通り捉えるべきものではなくて、ここから教訓などを学び取る寓話程度に理解すべきだと、そういう人たちが少なくないわけです。

そしてヘンリー・モーリスはその点についてこう言っています。「**新約聖書には創世記 1 章から 11 章までの引用や直接の言及が 100 箇所以上あります。さらに新約聖書の記者たちは皆各々の書のどこかで創世記 1 章から 11 章までの記事に言及しているのです。**(先程もそんな言及箇所を取り上げました。)そしてイエス・キリストご自身もこれらの書を、特に初めの 1 章から 7 章までの各章に書かれている誰かしら、また何かしらの記事を引用しているのだというこの事実も知らなくてははいけません。」つまりイエス・キリストを信じているならば、イエス・キリストが信じたように**創世記**を歴史的な事実として文字通り理解すべきだということです。勿論イエス・キリスト以外にも新約聖書を書いた使徒たちもほとんどが**創世記**の特に前半部分を直接引用していますので、彼らは文字通りそれが歴史的な事実であったと信じて引用しているわけです。ただの神話だとか、寓話のつもりで彼らは引用していないわけです。その事実をしっかりと私たちも踏まえていく必要があります。

そしてヘンリー・モーリスは続けてこう言っています。「**実際に聖書全体の権威を拒否することなく創世記の歴史性とそこにある神の権威を否定することはできません。創世記を拒否することは聖書全体を拒否することになります。**」ですから今まで書かれた書物の中で**創世記**が一番大切な書だと言えるわけです。**創世記**を拒否することは聖書全体を拒否することになるということです。「**もし最初のアダムが比喻に過ぎないなら、第二のアダムも比喻に過ぎないのは当然の論理です。**」第二のアダムというのはイエス・キリストのことです。最初の人アダム、そんな 1 人の人から全人類が誕生したなんて、そんなことは信じ難いとずっと言われてきたわけです。しかし、遺伝子工学なども今日発展するにつれて人類は 1 人の祖先から生まれてきたらしいということがだんだん良く分かってきたわけです。それはもう**創世記**の中には太古の数千年も前から言われていたことなんですが、でもまだ中には最初のアダムというのはただの比喻に過ぎないと。でも、もしアダムを比喻としてしまったら第二のアダム、あるいは最後のアダムと呼ばれるイエス・キリストも比喻というふうに捉えることは可能なわけです。「**また、もし人間が創造されたままの罪のない状態にとどまり、実際に罪に陥らなかったならば、人間に救い主が必要な理由はありません。**」原罪のこととか、その墮落の物語、全部これは神話であると、作り話だとした場合は、人間はそのまま今の状態のままで何も変わらないわけです。救いの必要性もないわけですし、救い主が必要だということにもならないわけです。「**また、もし万物が進化という自然の作用によって説明出来るなら、万物の未来における超自然的な完成を期待する理由は無いのです。**」これからどんどん進化していただけど。進化論が正しければそうなっていくはずですよ。でも、果たしてそうなっているのでしょうか。実際に物理の法則からしたら全てのものは進化どころか退化しているわけです。子供でもそのことぐらいはよく分かります。クリスマスのシーズンを迎えて子供たちはプレゼントを期待しています。去年クリスマスに何を

らったか、もう忘れています。なぜならばその新しいプレゼントはもう古びて使い物にならなくなったり、もう飽きられてしまってゴミ箱送りになっているかもしれないからです。そのように物は、すべて形あるものは崩れていくわけです。古びていくわけです。どんどんそれが進化して新しくなって優れたものになっていくと言ったら、これは物理法則に反するわけです。それは熱力学の法則と呼ばれるもの、エントロピーの法則というものです。これはまた後に触れたいと思いますが、進化論はそうした物理法則に反する、これは定説どころかむしろ仮説に過ぎないということを私たちは理解出来ます。ですから、もし進化論のままだったら未来には何の希望もありません。でも、聖書を見る限り必ず壊れたものが回復される、失われたものが取り戻される。それを贖いというわけです。これは人類にとどまらず全宇宙に適用されるものです。この地球はどんどん歳を重ねて衰退しております。いつか太陽も死んでいくわけです。ですから地球も死ぬわけです。そうしたら人類は滅びるわけです。しかし聖書によれば私たちはその滅びから免れて、そして私たちは神が新しく創造して下さる罪のついていなかった新しい天と新しい地に住まわせて頂くという素晴らしい贖いの計画がありますので、それを信じる者には未来に希望があるわけです。でも進化論を信奉する人々には何の希望もありません。

そしてもう一つは、ヘンリー・モーリスはこう言っています。「もし創世記が偽りならば、預言者や使徒たちが創世記は真実だと言った信仰告白も偽りです。イエス・キリストご自身も詐欺師であったか、またはご自身が欺かれていたかのどちらかで偽りの証人となり、ご自身の全知全能に関する証言は冒険になってしまいます。人間の永遠の救いのためのキリストの福音に対する信仰も全く空しい笑草になってしまうのです。ですから是が非でも創世記の記事が神話や比喻に過ぎないとするどんな働きにも対抗しなければなりません。創世記はありのままの歴史として書かれたものであり、万物の起源について神の靈感によって書かれた説明です。ですから誰でも万物の起源を創世記にある通りに受け入れて理解しなければ、何事に関しても完全な理解に至ることは期待できないのです。」何事に関しても完全な理解が出来ない。これは重要なことです。何かを理解したければ、私たちはまず創世記を理解しなければいけないということです。勿論この創世記を間違っただけで理解していたら、そのあなたの理解も間違ってしまうということです。あなたの世界観は間違ってしまうんです。あなたの人生観は間違ってしまうんです。間違っただけで生きていくわけでは有りません。このことをもう一度皆さんにも確認して頂いて、改めて創世記を学ぶことによって私たちはどこから来たのか、何のために今生きているのか、どこへ向かっていくのか、そのことも全て創世記の中にルーツが記されていますので、今一度自分の原点に立ち返って頂いて、そしてそれは信仰の領域にも当然関わってくるわけです。私たちの信仰観がずれていけば、やはりこの創世記によって修正していく必要があります。私たちの神観がやはりずれていけば、この創世記によって修正していく必要があります。

誰がこの創世記を書いたかということに今度は話を移したいと思います。これは言うまでもないことなんですが、聖書は神の言葉ですから創世記を書いたのは神様だと。原著者は神だということなんです。第二テモテ 3:16 に『聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。』とあります。特にこの「聖書は」と言っているのは、パウロがテモテへの手紙を書いた時点では、まだ新約聖書は完成していませんので新約聖書の中で「聖書は」という記述があったら、それはすべて「旧約聖書は」と言う意味であります。旧約聖書の中に当然創世記も含まれていますから、創世記はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益なものであります。この「神の靈感」というのは、「神の息吹によって」というのがその直訳です。神が息を吹きかけるとそこに命が生まれます。土地のちりから造られた最初の人アダムに神の息が吹き込まれたら、彼は生きた者となったわけです。それと同じように、今私たちが手にしている書かれた言葉、印字されたこの印刷の言葉も、これはただの言葉ではなくて、神の息吹が吹き込まれているものだから、生きた言葉なんです。命の言葉です。だから死ぬことはないんです。古びることもないです。これはとこしえに変わらない真理の言葉ですから、書き換えられることもないわけです。真理はいつの時代も真理です。後の時代になってから真理でなくなってしまうということはないわけです。だからこそ、これは神の言葉です。神には嘘偽りがありません。神は偽ることが出来ないお方です。

第二ペテロ 1:21 にもこう書いてあります。『なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされ

たのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。』これも同じような意味です。預言とありますけれども、預言というのは何も未来預言だけを狭い意味で指しているわけではありません。神の言葉を預かるということです。創世記もそういう意味では預言書であります。なぜならば天地創造時、誰がそれを見ていたのでしょうか。モーセが創世記を編纂したと言いましたが、モーセはその時生きていなかったわけです。アダムもいなかったわけです。つまりその天地創造時のことは、神が人間に啓示して下さらなければとても記録出来ないわけです。その意味に於いて創世記は預言書であるわけです。見たままを書いたそういった歴史の書というよりも、人間が見ていないことを神が特別に啓示して、それを文章に記録させたわけです。聖霊に動かされた人たちが神からの言葉を語った。特に創世記の1章2章にはそれが当てはまります。その聖霊に動かされた人たちの中にモーセという人がいたわけです。聖書は66巻ありますが、40人以上の記者たちによって編纂されました。そのうちの1人がモーセという人です。このモーセが最初の五書を書きました。それを『モーセ五書』と言います。”Pentateukos”とも英語で言います。創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の五書、これは全部モーセが編纂したものだということです。

でも、先程紹介した聖書を神の靈感の書だと信じない懐疑主義者とか自由主義神学の人たちからしますと「そうではない。モーセが書いたのではなくて、これは後代の人たちが後から書いたものだ。」と。特にイスラエルの歴史においては、南ユダの名君ヒゼキヤ王の時代から、そしてバビロン捕囚を経てエズラの時代、その間の人たちがこの『モーセ五書』を編纂したんだと。モーセという名前を彼らが使っているだけで、実際には無名の人たちがこのモーセ五書を編纂したんだと。モーセが書いたとは信じないという立場です。

しかし皆さんも知っての通り、新約聖書の中にこの『モーセ五書』というのは明らかにモーセが記したんだという記述がそこかしこにあるわけです。それも少し皆さんに御紹介しますので、メモ出来る方はメモして下さい。イエス・キリストが、『モーセ五書』はモーセが書いたとハッキリ言明しています。まずマタイの福音書 8:4、19:7~8、23:2。マルコの福音書 1:44、7:10、10:3~4。ルカの福音書 5:14、16:19~31、20:37、24:27~44。そしてヨハネの福音書 3:14、5:39、5:45~46、6:32、7:19、7:22~23。

勿論イエス以外にも新約聖書を書いた記者たちも口を揃えて「モーセ五書はモーセが書いたんだ。」と言及しています。イエス以外の人たちです。マルコの福音書 12:19、使徒たちもそう言っています。ヨハネの福音書 1:17、ルカの福音書 2:22、20:28。使徒の働き 3:22、6:14、13:39、15:1、15:21、26:22、28:23。今度はローマ 10:5、第一コリント 9:9、第二コリント 3:15、ヘブル 9:19。最後は黙示録 15:3。このうちのいくつかは後ほどまた開きますので、内容も皆さんそれぞれ開いて確認してみてください。

ただここで1箇所だけ今開きたいと思います。ルカ 16:31、この1箇所ですと足ると言っても良いと思います。『アブラハムは彼に言った。(この内容は、イエス・キリストが語っています。金持ちと貧乏人ラザロの物語をイエスが語っているんです。)『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』』モーセと預言者の教え、これは旧約聖書を指しているわけです。モーセというのは『モーセ五書』です。ですからこれは、イエス・キリストが『モーセ五書』はモーセによって書かれたものだと。でもそのモーセを信じないという場合はどうなるのか。このルカの 16 章を見ると分かります。『モーセ五書』最初の律法の書です。その書物を神の言葉と信じない者は、金持ちと同じところに死後下って行って、そこで泣いて歯ぎしりしながら、火によって焼かれながら、言葉に尽くせない苦痛を覚えながら、最後は究極の裁きの燃える火の池と呼ばれるゲヘナに投げ込まれていくわけです。ですから自由主義神学に立つ人がもし「私はモーセ五書と呼ばれるものはモーセの作と信じない。」と言え、彼らは残念なこと天国には行かないわけです。それは聖書の言明であります。「たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。」と言っていますが、自由主義神学の人たちは死人がよみがえるというその奇跡も信じておりません。ですから超自然的なこと、病気の癒しも死人のよみがえりも彼らは信じていません。そういう人たちは当然イエス・キリストも本当の意味では信じていないわけです。イエス・キリスト

が、『モーセ五書』はモーセが書いたんだとハッキリ言われているのに、彼らは「否、私たちはイエス・キリストよりもっと聖書を知っているんだ。それはモーセではなくて、ヒゼキヤ王の時代からエズラの時代の無名の誰かが書いたのであって、モーセじゃありませんよ。イエスは知らなかったんです。」というのが彼らの主張でありますから、彼らはイエスよりも、新約聖書の記者たちよりも自分たちの方が聖書を知っているという、如何にも傲慢な罪に陥っているわけです。そうした者が天国に行っているかどうかは、私には分かりません。でも聖書を見る限り彼らはどうも天国には行くことがないようなことであります。ハデスというところに行くというふうに書いてあります。大変厳しい言葉ですけども、でも私たちは聖書を単純に信じる者です。イエスがそうおっしゃっているならば、その通りだと。聖書学者と呼ばれる肩書きを持っている人たちが何と言おうと、イエスとそしてイエスの弟子たちが、パウロもそう言っているならば、私たちは『モーセ五書』と呼ばれるものはモーセが書いたものだと思えます。そういう単純な信仰となります。

ヨハネの福音書 5 章 39 節から。『³⁹あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。⁴⁰ それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。⁴¹ わたしは人からの栄誉は受けません。⁴² ただ、わたしはあなたがたを知っています。あなたがたのうちには、神の愛がありません。⁴³ わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。⁴⁴ 互いの栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。⁴⁵ わたしが、父の前にあなたがたを訴えようとしていると思っはなりません。あなたがたを訴える者は、あなたがたが望みを置いているモーセです。⁴⁶ もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずで。モーセが書いたのはわたしのことだからです。⁴⁷ しかし、あなたがたがモーセの書を信じないのであれば、どうしてわたしのことばを信じるでしょう。』モーセの書いたことを信じないということは致命的だということも知って頂きたいと思えます。

以前、創世記から申命記までの『モーセ五書』というものが神の靈感によって書かれているという確たる証拠を皆さんに 1 つ提示したことがあります。これは人が書きたくても書けるものではない、超自然的な操作によって作的に書かれたもので、そのようにはとても人は書けないということを皆さんには詳しくお話しました。初めて聞く方もいらっしゃるかもしれませんが、簡単に復習したいと思います。それは聖書の中に隠されている暗号のようなものです。バイブルコードと呼ばれるようなものです。多くの人はもう聞いているので、さらっと聞き流して頂いて良いかと思いますが、参考までに初めての方とか、或いはこれを CD とかインターネットで聞く方もいらっしゃると思うので、そういった方のために簡単に紹介させて頂きたいと思えます。申命記 29:29 をまずその前に開いて頂いて、これは『モーセ五書』の一つです。『隠されていることは、私たちの神、主のものである。しかし、現わされたことは、永遠に、私たちと私たちの子孫のものであり、私たちがこのみおしえのすべてのことばを行なうためである。』隠されていることは、私たちの神、主のものであると。そして、同じようなことが箴言 25:2 にも書かれております。『事を隠すのは神の誉れ。事を探るのは王の誉れ。』モーセ五書の中に原著者が神であることを記す指紋なるものが隠されているんです。神の指紋、それがバイブルコード。それは特別な方法によって埋め込まれているようなものであります。その方法というのは、等距離文字列法というものです。等距離の文字の間隔に文字の一定の配列というものが隠されているんです。これは勿論原書はヘブル語で書かれていますから、日本語でそれを見ることは出来ません。その文字の配列を暗号のように繋いでいきますと、1 つの単語が浮かび上がってくるというものです。それをスキップコードと俗称で読んだり、或いは聖書の暗号だとかバイブルコードとか言ったりしますが、『モーセ五書』にそういったものが実は隠されているという事は、もう昔からユダヤ教のラビによって指摘されてきたことであります。最近ではコンピューターによってそのことが誰にでも確認出来るように、便利な時代になったわけです。どういった言葉がその中に隠されているかと言いますと、まず創世記には「トーラー」という言葉が隠されています。「トーラー」というのはヘブル語で律法の書を指します。実際に『モーセ五書』は、ユダヤ教では「トーラー」と言います。律法の書、教えの書というのがその原意であります。「トーラー」というのはヘブル語で 4 文字で記されます。תורה。英語では「TORH」と仮に表記して皆さんに分かりやすく説明したいと思います。ですから最初の(タウ)「T」という言葉、これがまず出てくるはず

なんですが**創世記**のはじめの言葉から 49 文字数えて(49 という数字も 7 の 7 倍なので、これは完全数で特別な数字でもあります。) 50 文字目が(タウ)“T”という言葉。等距離ですから全く同じ文字数、49 文字行って 50 文字目が今度は(ワウ)“O”にあたる言葉。やはり 50 文字目が次に来るのが当然(レイシュ)“R”という言葉。最後残る(ヘイ)“H”もやはり同じ 50 文字目に来るわけです。それで終わってしまうかといったらそうではありません。その後もずっと同じ等距離で文字配列が規則正しく進んでいくわけです。”TORH” ”TORH”と、それが最後までずっと規則正しく等距離のままです。1 つもその文字数は違えられない形で、この 4 文字が規則正しく埋め込まれているわけです。これは驚くべきことです。

それは**創世記**限りかと言ったらそうではありません。続く**出エジプト記**にも実は同じ結果を見ることが出来ます。**創世記**だけだったら、と思うかもしれませんが、それでも**創世記**だけでも膨大な書物ですから、それを人間がそのような暗号をわざと意図的に埋め込んだ形で文章を作るというのは至難の業です。ましてや**出エジプト記**までと言ったら、これはとても人間が書けたものではないというふうになるわけです。その次に「トラー」は勿論 5 つあるわけですから、3 つ目の書『**レビ記**』があるわけです。**レビ記**になるとどうかというと残念なことと同じ原則は見られません。ちょっとほっとする感もありますけれども、でもその後『**民数記**』。**民数記**になるとどうなるか。そこには等距離文字列法が適用出来るそういった単語が出てきます。でもそれは「トラー」という言葉なんですけれども、逆さ読みで、即ち後ろの文字から“H”から始まるわけです。49 文字数えて 50 文字目に“H”。その後“R”が来ます。そして“O”、最後に“T”。等距離で 50 文字目にその 4 つのアルファベットが浮かび上がってきます。これも作為的に逆さ読みで作るというのも、これも却ってひねるのが難しいというぐらいです。最後の**申命記**も実は**民数記**と同じように「トラー」の逆さ読みが等距離間隔で 50 文字目にそれらの 4 つのアルファベットが組み込まれております。それにしても**レビ記**だけが適用できないのは残念だなと、どうもスッキリしないと思うかもしれませんが、しかし**レビ記**にも実は、**創世記**、**出エジプト記**、並びに**民数記**、**申命記**とは全く違う等距離文字列法というのが適用出来ます。それは同じ文字列ではなくて、文字数ではなくて、同じ文字・単語ではありません。実は**レビ記**に関しては、**ヤーウェ**という神の個人名を表す 4 文字、それは特に**神聖四文字**と呼ばれています。יהוהという 4 文字。英語のアルファベットに変換しますと”YHWH”という 4 文字。これが実は**レビ記**には等距離文字列法として適用出来るわけです。**レビ記**においては 7 文字ごとに”Y”、7 文字ごとに”H”、そして 7 文字ごとに”W”、そして最後に”H”が来るわけです。これがずっと最後まで規則正しく 7 文字間隔でこの 4 文字が刻まれています。**創世記**と**出エジプト記**は”TORH”、**レビ記**は”YHWH”。そして**民数記**と**申命記**はトラーの逆さ読みで”HROT” ”HROT”となっているわけです。これを横並びに是非皆さん書いてみて下さい。**創世記**から”TORH” ”TORH”。真ん中は”YHWH”。最後の 2 つが”HROT” ”HROT”と横にずっと書いていただくと、真ん中の**ヤーウェ**に全てが向いているように見えてくると思います。中心は**ヤーウェ**です。つまりトラーの中心は、『**モーセ五書**』の中心は**ヤーウェ**である。**ヤーウェ**を指し示しているんだという、そういう格好になるわけです。

そして、先ほど**ヨハネの福音書 5 章**で私たちが読んだばかりです。『**モーセが書いたのはわたしのことだからです。**』と、つまりイエスこそが**ヤーウェ**であるということです。こういったスキップコードというのは、意図的でなければ作れないものです。偶然ということがないということも触れておきたいと思います。トラー『**モーセ五書**』全部で文字数の総数は 304,805 文字あります。それにもし今のような等距離文字列法をあらかじめ組み込んで、それが偶然出来る確率なんていうのはどれくらいかと言うと、統計学上 300 万分の 1 ということだそうです。300 万分の 1 なんていう確率は、不可能だという数字だということです。ですから「**創世記**は、これは後の時代の人編纂したんだ、人間が書いたんだ。」というのはとても無理だということです。神が書いたとしか言いようがない。それをモーセが編纂したわけです。聖霊に動かされてモーセが編纂したと。当然最初の記事は、最初の人アダムが神から天地創造のことを聞かされて、それを子供たちに口伝で伝えたかもしれません。或いは文字にしてそれを子孫たちに伝えていったのかもしれません。最終的にそれをモーセが受け取って、口伝にせよ、また書かれた記録文書にせよ、それをまとめたのがモーセということです。

もう1つ指摘しておきたいことは、**マタイの福音書 5:17~18**にイエスがこうおっしゃっているんです。『**17**わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。(律法や預言者、これは旧約聖書のことを指しています。)¹⁸ まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の(トローラーの中の)一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。』“一点”というのは、ヘブル語ではアルファベットで「ヨッド」という言葉を指しています。「ヨッド」というのは点のように小突起の小さな鉤のような形をしています。この「ヨッド」というアルファベットの一方の線を少し伸ばすと“一画”になるんです。その“一画”というのは「バーブ」という言葉です。ですからちょっと線を伸ばしたりするだけで別のアルファベットになってしまう。別のアルファベットになったら、別の単語になってしまうわけです。さらにその線を少し伸ばすだけで「ダーレット」というアルファベットにもなってしまいます。両方の線を伸ばしてしまったら「レイシュ」というアルファベットになりますから、ちょっとの書き損じで全く別のアルファベットになって、別の単語になってしまう。ですから一点一画でもずれたら、このバイブルコードなるものは生まれません。聖書は文字通りすべて神の靈感によって書かれたものです。一文字一文字神の靈感によって書かれたものです。ですから、この部分は神の靈感によらないとか、部分靈感だとか、或いは全てこれは人の創作であってギリシャ神話だとかそんなものと何ら変わらないものだと、ただの古代の宗教書だというふうには片付けられないということです。他にもこういった例はあることは、皆さんに既にお伝えしているので、ここではこの辺で止めたいと思うのですが、しかしイエスがトローラーの中心であり、イエス・キリストご自身がヤーウエであるということは、もう一つヨハネの福音書 19章 19~22節に書かれている内容からも皆さんにお伝えしておきたいと思えます。『**19** ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには「ユダヤ人の王ナザレ人イエス。」と書いてあった。²⁰ それで、大ぜいのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったからである。またそれはヘブル語、ラテン語、ギリシャ語で書いてあった。²¹ そこで、ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、「ユダヤ人の王、と書かないで、彼はユダヤ人の王と自称した、と書いてください。」と言った。²² ピラトは答えた。「私の書いたことは私が書いたのです。』罪状書きになっていないんですけども、イエスの頭上には「ユダヤ人の王ナザレ人イエス。」と書いてありました。それは世界の当時の世界の人たちが誰でも読める 3 つの言葉で記されていました。ヘブル語というのはユダヤ人の母国語であります。聖書の言葉です。ラテン語というのはローマ帝国の言葉です。ギリシャ語というのは世界の共通語です。この時ちょうど過ぎ越しのお祭りで、世界中から 250 万人位の巡礼者が集まって来ていましたから、誰もがイエスの頭上に掲げた罪状書きを目にして読むことが出来たわけです。でもこの特にヘブル語で書かれた罪状書きの内容についてユダヤ人の祭司長たちがポンテオ・ピラトに対して「これを書き換えて欲しい。」と訴えるわけです。「ユダヤ人の王、と書かないで、彼はユダヤ人の王と自称した。」と書き直してもらいたい。別にどうだっていいわけです。イエスを畏にハメて冤罪で自分たちの要望通り十字架刑に最終的に追い込んでイエスを殺害に至っているわけですので、もう文句ないはずなんです。でもここで敢えて彼らは「罪状書きを書き直してもらいたい。」と言ったのには重大な意味があったわけです。ヘブル語ですとこれは日本語と一緒に右から左に読むわけです。私たちの聖書も創世記が右にあります。英語では真逆であります。ですからこれはエルサレムを軸に東の国々というのは、右から左に読むようになっています。エルサレムから見て西側が逆に左から右に読むという、これは不思議なことですけども、そのようにきれいに分かれています。そして、このヘブル語ですとですから、イエスから始まっていくんです。イエシュア。そしてナザレ人、ハナザライ。そして、ユダヤ人の王、これはブメレク。そしてユダヤ人は、ハイエフディムと言います。そのヘブル語の罪状書き、これをユダヤ人が見るとどう見るか。先程バイブルコードの話をしましたけれども、彼らは私たちとはちょっと違った物の見方をするわけです。彼らはよくアクロニウムというものに注意が行くわけです。詩篇の中にもアクロニウムというのがあって、最初の文字、それがアルファベット順になつたりしているわけです。ですから彼らはそういうものに関心があって、日本人で感覚的に言うところの“いろは歌”みたいなものが、アクロニウム詩篇ということでよく詩篇に使われているわけです。すぐそういうものを彼らは見るようなそういう癖があるわけです。その罪状書きを見ると彼らに驚くべきものが文字列として飛び込んで来たわけです。それは何かというと、**神聖四文字**がイエスの頭の上に掲げ

られているのに彼らは一目で気付いたわけです。イエシュアのイエシュアというのは英語で言えば“Y”です。そしてハナザレイ、“ハ”というのが定冠詞になっていて、それが英語で言う“H”です。ブメレク、王という意味ですが、その“ブ”というのも定冠詞で、これが英語では“W”にあたります。最後にハイエフディムと、ユダヤ人。このユダヤ人にも“ハ”という定冠詞が付いていて、これも“H”です。つまり“YHWH”という言葉が、罪状書きに浮かび上がっているわけです。「これは困る。ヤーウエとしてイエスが死んだ、なんていうことはとてもじゃないけれども認められない。これを書き換えて欲しい。」と言うのはユダヤ人ならばよく分かります。でも実際にイエスは自らヤーウエと名乗って死なれていったわけです。裁判の場でも大祭司に対して「**私はあるというものである。**」とはっきり言明されたわけです。勿論その前から何度となく「**私はあるというものである。**」と、ヤーウエ宣言を何度となくしてきました。「**アブラハムが生まれる前から私はあるというものである。**」と。ですから、イエスはヤーウエだということを自ら何度となく宣言していましたから、最後までヤーウエとして死ぬと。でもヤーウエとしてよみがえるということもこの後あるわけです。そして、それら全てはトラーの中にも書かれています。『**モーセ五書**』の中に、すべての起源は『**モーセ五書**』の中に。特に**創世記の1～11章**の中にすべてイエスのことが書いてあります。すべてのルーツが、そこに見ることが出来ます。

ということで、原著者は神であること。そして特にそのテーマは、ヤーウエなるキリスト・イエス。そして、それらすべてをまとめ上げたのがモーセという人だと。これには異論がないかと思えます。イエス・キリストもモーセが書いたとおっしゃっていますし、使徒たちも口を揃えてモーセが書いたと言っているわけですから、イエス以上に、使徒たち以上に聖書を理解することはとても私たちには出来ないはずですので、彼らが言うなら間違いないということです。勿論私たちは聖霊によってそのことも教えて頂けます。聖霊が私たちのうちに住んでいます。聖霊が書いた聖書は、聖霊が正しく教えてくれます。聖霊はすべての真理に私たちを導き入ると書いてありますから、別にヘブル語の知識がなくても、ギリシャ語の知識がなくても、神学校なんか入ってなくても、イエス・キリストを信じている者には聖霊が住んでいますから、聖霊がちゃんと正しく教えてくれるわけです。

また話を戻したいと思います。イエス・キリストが聖書 66 巻全体のテーマであるということは、この前の学びでも詳しく『**聖書 66 巻の中のキリスト**』という題目でお伝えして来ましたので、**創世記**もそれに漏れないことは言うまでもありません。アダムから始まる人類の歴史、それは最後のアダムと呼ばれるイエス・キリストの歴史でもあるということを知って下さい。**第一コリント 15:45** にイエスのことが“**最後のアダム**”と呼ばれています。最初のアダムは罪を犯して墮落して死ぬ者となったわけです。でも最後のアダムは、その死ぬべき宿命にある、滅びが定められている私たちを生かすためにこの世に来て下さったわけです。その最後のアダムは、再び死人の私たちのうちに神の息を吹き込んで私たちを生かす御霊となって下さったわけです。そのことが**第一コリント 15:45** に書いてあります。人として来られた神の子イエス・キリストの歴史の始まりは、**ルカの福音書 3:23～38** の系図に記されています。ですからよく英語で“歴史”のことをヒストリー“history”と言いますが、それは、His Story です。彼の物語、イエス・キリストの物語に他なりません。そうやって**創世記**をやはり皆さんに見て頂きたいと思えます。単なる歴史上の出来事を物語的に記録した書物に留めることなく、これは神の靈感によって書かれた特別な啓示の書であるということです。これは、性格的には聖書の最後の書物である**黙示録**にむしろ近いと言って良いぐらいです。**創世記**と**黙示録**。全く似て非なるものだと思うかもしれませんが、実は極めて似ています。**創世記**は人間の起源の歴史だけではなくて、人間の未来の預言も成していますから、**黙示録**との繋がりというのも容易に見出すことが出来ます。**創世記**では失樂園を経験します。人間の罪によってエデンの園から追放されるわけです。パラダイスは失われます。でも**黙示録**において、そのパラダイスが、神の園が回復されるということが書いてあります。**黙示録 22:13** というところには、イエスが「**私はアルファでありオメガである。最初であり最後である。**」というふうにしてご自身のことを紹介しています。最初であり最後である。**創世記**にもイエスは出て来ますし、**黙示録**にもイエスは出て来ます。聖書 66 巻はイエス・キリストに始まり、イエス・キリストに終わる。イエス・キリストがテーマの書物であります。**創世記 1:1** から最後の**黙示録 22:21** まで、すべてその内容はパラダイスの回復という救いの完成。それがイエス・キリストというお方によって成し遂げられるというその内容であります。

その**創世記**と**黙示録**の中に書かれている内容の比較を皆さんにご紹介したいと思います。この内容については以前10年前になりますが、礼拝の中で触れなかった内容はすべて週報の礼拝黙想というところに記して資料として提供したりしていますので、そういった週報を残している方がいらっしゃればそこに全部書かれていることを今から言いますので思い出して下さい。もしそれを受け取っていない方は、今から言いますし、また後でいくらでもリピートしてメモして頂けるようにします。またプリントも出来ると思いますので、とりあえずは聞いて下さい。

まず**創世記**の原初の世界と**黙示録**の永遠の世界の比較の中で、**創世記 1章 1節**に古い天と地が出てきます。それが**黙示録 21章 1節**では新しい天と地になっています。

次に**創世記 1章 4節**、光と闇との区別が成されます。**黙示録 21章 25節**では、もう光と闇の区別はありません。そこには夜がないと。もう光しかない世界です。

創世記 2章 10節では、地と海との区別があります。でも**黙示録 21章 1節**では、もはや海がない、とあります。

そして**創世記 1章 16節**では、太陽と月の支配があります。今と同じです。でも**黙示録 21章 23節**では、太陽も月も要らない、とあります。小羊が、イエス・キリストが私たちの明かりとなって下さいます、光となって下さいます。

創世記 2章 8～9節では、エデンの園の住人としてアダムとエバのことが出て来ていますが、**黙示録 21章 2節**では、都の住人となっています。園ではなくて都です。これは新しいエルサレムという神の都の住人です。エデンの園からするとレベルアップしているわけです。グレードアップしています。その都にもエデンの園が復元されているわけです。それ以上のものです。

創世記 2章 10節には、エデンから出ている川がいくつか出てきます。**黙示録 22章 1節**では、神の御座から出ている川が出てきます。いのちの水の川です。

創世記 2章 12節では、地にある金、^{きん}いろいろな金属、宝石も出て来ますが、金の言及があります。**黙示録 21章 21節**では、都にある金が言及されていますが、その都にある金というのは決して高価なものではないです。どうしてかと言いますと、その金は道路の舗装に使われているからです。今で言えばアスファルトと同じ価値であるということです。天国において金は、純金はアスファルト程度のもので、この地上でアスファルトを目の色を変えて欲しがると人はいないと思います。アスファルトを見たらもうすぐに掘りたくなくなるんですとか、そんな人は誰もいないと思います。それと同じように天国に行ったら、金なんか見てももう目にも留まらないわけです。ただの舗装材ですから。それだけ全く違う価値観です。

創世記 2章 9節では、園の中央にあるいのちの木がありますが、これは**黙示録 22章 2節**では、都にあるいのちの木となっています。いのちの木はそこにもあります。

創世記 2章 12節には、**ブドラフ**と**しまめのう**という宝石が出てきます。それが何を指すのかは不明な点もありますが、**黙示録 21章 19節**では、あらゆる宝石が出てきます。エデンの園にあった宝石以上のあらゆる宝石が出てきます。上回る種類、上回る数です。

創世記 3章 8節では、園を歩き回られる神が登場します。**黙示録 21章 3節**では、彼らと共に住まわれる神として紹介されています。歩き回るのではなくて、共に住んで下さるお方。

創世記 3章 17節では、のろわれた地、となっています。今の地球はのろわれた地です。天地創造時の完璧な状態ではなくて、人類が罪を犯して以来この土地ものろわれてしまっていますから、だからこそ自然災害が生じるわけです。だからこそ弱肉強食の世界があるわけです。だからこそ病気や飢餓、そして勿論戦争や犯罪というものが生じるわけですが、それはのろわれた地だからです。その一方で**黙示録 22章 3節**には、もはやのろいはない、とされています。

創世記 3章 17節では、一生苦しむんだ、と書いてあります。男も女も一生苦しむ。ですからこの世はパラダイスではありません。この世に生きている限り苦しむんです。受け入れて下さい。それを英語で”That’s life.”と言います。それが人生だと。もう聖書によれば一生苦しむのが人生だと言われているわけです。でも**黙示録 21章 4節**には、もはや苦しみはない、とあります。だから私たちは天国に憧れるわけです。この地上が天国ではないということです。

創世記 3 章 18 節には、いばらとあざみが生じていくわけです。これはのろいの象徴として生じたものです。黙示録 21 章 4 節では、もはや悲しみも叫びもない、とあります。

創世記 3 章 19 節には、額に汗を流す。日本人はこれを美德のように考えるかもしれませんが、これものろいの結果です。黙示録 21 章 4 節では、涙はぬぐわれる、とあります。ですから今は額に一生懸命汗を流して働いても、こき使われても、見合った評価を受けなかったり、報われなかったりするわけです。「こんなに一生懸命頑張ったのに、たったこれだけか。全部もってかれたのか。」これからどんどん税率が上がってくると思います。仕方がないと思うかもしれませんが、実はこの税が上がっていく、重税となっていくのも、これも罪の結果だということを創世記から見る事が出来ます。税を上げなければ機能しなくなるのはなぜかということも、実は創世記に見ることが出来ます。

創世記 3 章 18 節には、野の草を食べる、とあります。野の草を食べる、のろいの結果です。黙示録 22 章 2 節には、12 種の実がなる。素晴らしいですね。まさにフルーツ天国です。

創世記 3 章 19 節は、人は死んだらちに帰る、とあります。土地のちりから造られたから、土地のちりに帰る。しかし黙示録 21 章 4 節には、もはや死はない。素晴らしいですね。

創世記 6 章 5 節、ノアの時代です。いつも悪いことに傾く。世の終りはノアの日のようなのだ、とイエスは預言しています。人の考えることはいつも悪いことに傾くわけです。一方で黙示録 21 章 27 節には、汚れや憎むべきものはないと。

創世記 3 章 21 節、そこには皮の衣が出てきます。アダムとエバの罪を贖うために神は 1 頭の動物、おそらくは羊を屠^{ほふ}ったわけです。初めの死が入ったわけです。罪から来る報酬は死です。しかし代わりに人間ではなくて羊が屠られたわけです。その皮の衣を着せられてアダムとエバの罪は贖われていくわけですが、でも黙示録 19 章 14 節には、そのようなものはもうありません。まっ白な、きよい麻布の衣が用意されています。これは純白のウェディングドレスと考えて下さい。これを着るのは、キリストの花嫁と呼ばれる教会です。

そして創世記 3 章 15 節には、サタンの敵意がむき出しになっています。サタンは女の子孫のかかとかみつこうとします。黙示録 20 章 10 節には、このサタンは火と硫黄の池に投げ込まれます。それがゲヘナというところ。そこで永遠に滅んでいくということです。

創世記 3 章 14 節、いのちの木から遠ざけられるという悲劇が出てきます。失樂園です。その一方で黙示録 22 章 14 節にはいのちの木の実を食べる権利を得る、とあります。

そして創世記 3 章 23 節は、エデンの園からの追放。これも同じような内容ですけれども、黙示録 22 章 14 節には、神の都、新しいエルサレムでは自由に入るとあります。

そして創世記 3 章 15 節には、(原福音のところです。)約束された贖い主、女の子孫。これは単数形になっています。1 人の男の子孫です。そして女の子孫は、文字通りは「女の種」と訳される言葉です。“種”というのは、“精子”という意味でもあります。女の精子なんていうものはありません。けれども処女が身ごもったらそうなるわけです。つまりそれが約束のメシア。そのメシアが蛇の頭を踏み砕く。それが約束された贖い主です。でもその約束された贖い主は、黙示録 5 章 9～10 節によれば、完成された、成し遂げられた、贖いとして屠られた小羊がすべて成し遂げられたということは、そこで賛美されています。

最後に創世記 9 章 16 節、ノアの大洪水の後の契約の虹のことが書いてあります。そして、この虹が実は天にもあります。黙示録 10 章 1 節、「強い御使い」と呼ばれるのはイエス・キリストのことです。その強い御使いの頭の上に虹があります。これは半分で切れている虹ではなくて、円周の丸い途切れることのない虹であります。

全部創世記に書かれていることは、黙示録の中にも言及されているということを知って頂いて、この両書の類似性・関連性というものを皆さんにもしっかりと踏まえて頂きたいと思います。それを見ることによって創世記の読み方は変わってくると思います。これはすべての書の土台でありますけれども、最初の書(創世記)と最後の書(黙示録)によって間はサンドイッチされているわけです。ですから創世記に書かれたことは全て黙示録において成就しているということでもあります。

興味深いことに**黙示録 15 章 3 節**のところを見て頂くと、天に上げられた者たち、贖われた者たちの歌として記されているのが、モーセの歌と小羊の歌と。これは贖われた者でしか歌うことの出来ない讚美歌です。モーセの歌と小羊の歌、**黙示録 15 章 3 節**にあります。これはモーセというのはモーセですが、小羊と言うのはイエス・キリストのことです。モーセによる**創世記**と**イエス・キリストによる黙示**。**黙示録 1 章 1 節**にはそう書いてあります。**イエス・キリストの黙示**と書いてあります。ですから**黙示録**は明らかに**イエス・キリスト**が書いたものです。**ヨハネの黙示録**と言っていますけれども、実際には**イエス・キリスト**が書いたものだというのは、**黙示録 1 章 1 節**から明らかです。モーセによる**創世記**と**イエス**による**黙示録**、それがちょうど組み合わせあってジョイントしているような歌が、モーセの歌と小羊の歌です。

創世記から読み始めて**黙示録**まで、最後まで通読するならば、あなたは必ず**イエス・キリスト**を礼拝せずにはいられなくなると思います。それがこの聖書を読む目的でもあります。最初から最後まで満遍なく **66 巻**を読み通すその目的は、最後にはあなたはモーセの歌と小羊の歌を捧げる礼拝者に変えられています。それが聖書の目的でもあります。それを**創世記**から始めて行きたいと思っております。

今日はこれぐらいで終わりたいと思います。少し早めに閉じさせていただきますので、次回に序論のパート2をやりたいと思います。次回の序論ではやはり**創世記**というものが土台だということを強調しながら、これを具体的に私たち自身にも当てはめながら、先程も少し触れましたけれども、すべての起源だと言いましたので、いろんな領域に**創世記**を当てはめて、人間についてとか、或いは結婚について。今特に同性愛の問題が上がっています。同性婚、これについて日本人も漸く考え始めるようになったと思います。これについても**創世記**から私たちは正しく知ることが出来ます。「どう思いますか。」という意見を皆さん問われることがあると思いますが、私たちにはハッキリ言って意見は必要ないんです。何が必要かと言いますと、人の意見というのは様々でありますので、それぞれいろいろな土台を持っていろいろな価値観を持っているわけです。でも私たちが本当に必要なのは、揺るがない、変わらない土台に基づいた神の意見です。神の見解です。それ以外は、時代時代によってコロコロ変わるものですから当てにならないものですし、それは普遍的なものではありません。変わってしまうものですから正しくないわけです。正しくないものをいくら信奉したところで、それには何の意味もありません。ですからそういったことも聖書から、特に**創世記**から皆さんもしっかりとした、確立された土台というものがもう既に与えられていますから、これに基づいて私たちも物事を見て判断して、考えていく必要があります。子供からいろいろなことを質問をされる時、皆さんはどうやって答えるでしょうか。「私が言ったんだから、私の言う通りにしなさい。親の言うことを聞けないのか。」そういう親の権威をかざして言うことを効かせるのも 1 つの方法かもしれませんが、でもそれが通用しない日もやって来るわけです。幼稚園ぐらいまでは通用するかもしれませんが、でも、もう小学校高学年とか中学生になったらどうでしょうか。親が言うことなんてどうだってよくなるわけです。「それはあなたの意見でしょう。」なんて言われてしまうわけです。生意気に、と皆さん思うかもしれませんが、確かにその通りなんです。それはあなたの意見でしかないんです。「友達の親はそうは言っていない。」それで終わりです。世間はそう言っていない、学校ではこう言っている、友達はこう言っている。いろんな意見があるわけです。その中であなたの言うことも、ただ 1 つの意見に過ぎない。誰の意見が正しいのですか。子供たちは迷っています。子供たちはいろいろな土台を植え付けられています。学校に行ったら聖書とは違う土台を彼らは植え付けられていくわけです。ですから子供たちはその土台によって物事を考え始めて、小さい頃は聖書が土台だと思って教会に通っていた頃は、それに基づいてものを考えてきたかもしれませんが、でも学校に行ったりして進化論を教えられたりして、或いは「創造主なんかいない。」というヒューマニズムの哲学によって、無神論によってその土台が据え替えられていくわけです。そうして行くと彼らは「もう神なんかいないんだ。あんなノアの箱舟なんていうのはおとぎ話だ。動物が船に乗っかって、面白い話だけれどもそんなものを文字通り信じるなんてあり得ないよね。そんなことを言ったら馬鹿にされるよね。聖書では同性愛は罪だと言っているけれども、それは時代錯誤だよ。結婚前にセックスをしてはいけない、そんなのは古すぎる考え方だよ。もう小学生でも中学生だってみんなセックスしてるじゃないか。性病にならなければ、性感染症にならなければいいじゃないか。ちゃんと避妊していればいいんじ

やないか。何が悪いんですか、減るもんじゃないし。人を刺して何が悪いんですか。人を殺して何が悪いのか。」「悪いものは悪いんだ。」そんなことは通用しません。あなたの意見だけでまかり通るわけではないということはこの**創世記**から皆さんもちゃんと学んで頂いて、そしてこれが土台となって、子供たちにどう伝えればいいか、ということも学んで欲しいと思いますし、勿論子供だけではなくて、これからは周りの人があなたにいろいろ質問してくると思います。「クリスチャンはこういうことについてどう考えているんですか。あなたはこのことについてどう思いますか。」「答えようがありません。」では問題です。答えられないのは、あなたには**創世記**という土台がないからです。聖書は読んであるかもしれませんが、ある程度内容は把握しているかもしれませんが、**創世記**を正しく理解していなければあなたには何の土台もないわけですから、いざという時にはまともに答えられないわけです。言葉に困るわけです。返答に困るわけです。でも幸い土台がもう与えられていますから、これさえ学んでおけば、押さえておけば、あなたはどんな難問にも答えることが出来ます。堂々と答えることが出来ます。反論されてもちゃんと返すことが出来ます。反証も出来ますし、論破も出来ます。そして神がそんなあなたをちゃんと支えてくれますし、守ってくれます。そうやって私たちの先祖たちは、歴代のクリスチャンたちは聖書を本気で信じて、命を懸けてきたわけです。そうやって私たちのために信仰が遺産として残されて、継承されてきていますので、そういった信仰も私たちもしっかりと継承して、次世代に継がせていく必要があります。私たちの子供たちに、若い世代に、しっかり聖書という、特に**創世記**という土台に基づいた聖書信仰というものをもたらしていく必要があるのです、その辺の話を次回、**創世記**の序論のパート2でお伝えして行きたいと思います。

そしてその様子で**創世記 1 章 1 節**に入るタイミングが図れると思いますので、またその辺を皆さんにも祈って頂きながら、50 章までありますので、多分**創世記 1 章 1 節**だけでも 1 ヶ月ぐらい出来るところなので、そういうペースでは、皆さんの多くはもう天に召されてしまうと思いますので、イエス・キリストが戻って来られるのが先か、皆さんが天に召されるのが先か、どっちか分かりませんが、前回 10 年かかっていますから、なんとか皆さんと共に最後まで出来ればと願っております。ではこれで終わりたいと思います。